

発掘資料からみる江戸東京の連続性・非連続性

日時 二〇〇八年一月二日(土) 一五:〇〇～一七:三〇
会場 たばこと塩の博物館 一階視聴覚ホール

開会挨拶	大河喜彦	3
趣旨説明	小林 克	4
報告 ① 江戸から明治の連続性―嗜好品ならびに「洋風建築」を中心に―	谷田有史	5
報告 ② 港区の調査事例から見る近世から近代への変化の様相	毎田佳奈子	8
報告 ③ 土管でつながる江戸から明治―豊島・新宿・千代田区の事例から―	水本和美	11
報告 ④ 町人地・武家地の江戸から明治―日本橋・京橋地域を中心に―	仲光克顕	14
コメント	波多野純	18
質疑応答	小林(司会)＋仲光＋毎田＋水本	20
江戸東京フォーラム話題一覧他		23

開会挨拶

たばこと塩の博物館館長

大河喜彦

本日はお足元の悪いなか、「江戸東京フォーラム」にご参加いただきまして、誠にありがとうございます。

資料を見ておりましたら、江戸東京フォーラムは、なんと二〇年以上にわたり、延べ一七七回フォーラムを継続しているようですが、大変長寿の定期フォーラムだと驚きました。

最初に当館の特別展の開催状況について若干ご紹介したいと思います。

ご案内のとおり、本年二〇〇八年は、ハリスと江戸幕府が日米修好通商条約を締結してからちょうど一五〇周年に当たっております。また、当館も本年二〇〇八年が開館三〇周年に当たり節目の年になっていきます。それに合わせて現在、「幕末ニッポン―ハリスと黄昏の大君の都―」という展覧会を開催中です。幸い大変多くの方に入館いただきまして好評でございます。

今回の「江戸東京フォーラム」では「発掘資料からみる江戸東京の連続性・非連続性」という非常に興味あるディスカッションが行われます。江戸東京と言いつても、地域ごとにさまざまな発掘資料が出ておりますから、そこにはさまざまに異なる文化があったということは想像されます。また、それが連続的であったか非連続的であったかということに対しては、私自身も大変興味をもっているところでございます。

今回は当館と住宅総合研究財団の共催という形で江戸東京フォーラムが開催されています。住宅総合研究財団には、展覧会の幕末ニッポンのリーフレットなどでも非常にお世話になっていきますので、この席をお借りしまして厚く御礼申し上げたいと思います。

このフォーラムが成功裏に行われますことを祈念いたしまして、私のご挨拶とさせていただきます。

おかわ・よしひこ

一九四五年千葉県生まれ。東京大学農学部卒業。薬学博士。たばこと塩の博物館館長。JT非常勤顧問。



会場の様子

東京都歴史文化財団

小林克



本日の「江戸東京フォーラム」は「発掘資料からみる江戸東京の連続性・非連続性」というテーマで開催いたします。この「江戸東京フォーラム」は、近年、東京の地域学を掘り起こそうということで、地域研究をきちんと取り上げるシリーズを行ってきました。江戸東京は連続的なのか、非連続的なのかを、さまざまな学問分野から追及しているわけですが、そうしたなか、考古学にあっても、江戸の発掘調査が非常に盛んになっています。江戸遺跡の発掘をする、必ずその上には東京、近代があります。また、近代の明治以降の遺跡の発掘も、いくつかの場所で行われています。

本日は千代田区、港区、中央区を中心にした都心部の、江戸東京の事例を報告していただきます。最初に「たばこ塩の博物館」の谷田氏、二番目が毎田氏、三番目が水本氏、四番目が仲光氏という順番に発表していただきます。そのあと質疑・討論という形で、コメントを波多野純先生にいただく形で進めたいと思っております。

今日は雨のお寒いなか、皆さん集まってくただきまして、本当にありがとうございます。それではフォーラムの報告を開始したいと思います。

こばやし・かつ

一九五九年新潟県生まれ。日本大学史学専攻修了。一九八九年より学芸員として江戸東京博物館準備に携わる。江戸東京博物館オリジナルグッズ「今戸焼」など四シリーズを制作。共著に『掘り出された都市——日蘭出土資料の比較から』ほか。『昔のくらしの道具事典』で産経児童出版文化賞大賞受賞。

江戸から明治の連続性

「嗜好品」ならびに「洋風建築」を中心に

たばこ・塩の博物館

谷田有史



――幕末とはいっつか？――

私は直接、近世・近代の遺跡の発掘には携わっておりません。ですから今日は、最近の発掘調査のなかで見聞きしたことなどをもとに、近世と近代を結びつけている幕末という時代について、私なりに考えているところを述べたいと思います。

まず、幕末を「いつからいつまでの期間とするか」という問題があります。その終わりについては、徳川幕府が瓦解して明治新政府が樹立された慶応四年――明治元（一八六八）年――とすることに特に異論はないでしょう。一方、その始まりはいつなの

か。これには諸説ありますが、私は、嘉永六年六月（一八五三年七月）のペリー来航がひとつの区切りではないかと考えています。翌安政元（一八五四年）年に日米和親条約が締結され、二世紀以上に渡って続いた鎖国が終わります。この日米和親条約中の外交官の駐在に関する条文にしたがって、タウンゼンド・ハリスが初代アメリカ駐日総領事として安政三（一八五六年）年来日します。

ハリス来日の最終目的は、日米修好通商条約の締結です。ハリスは下田に着任してから一四カ月後の一八五七年一月三日、和暦安政四年一〇月一四日に江戸に出て、九段坂下にあった蕃書調所に逗留します。そして、一三代將軍家定二〇〇八年大河

ドラマの主役篤姫の夫に謁見してアメリカ大統領の親書を上呈します。以降幕府と一四回に及ぶ交渉を重ね、一八五八年、江戸湾小柴沖の米艦ポーハタン号の上で、日米修好通商条約を結ぶことに成功します。

幕府はその後、アメリカの修好通商条約と同様の条約を、オランダ、ロシア、イギリス、フランスと締結。その結果、既に開港していた下田、箱館のほか、神奈川、長崎、新潟、兵庫の四港を新たに開港、幕府

の管理が及ばない自由貿易が始まるわけです。さらに江戸には、各国の公使館も置かれることとなりました。

以上のことから、広い意味での幕末の始まりは嘉永六年、一八五三年のペリー来航時、そして狭い意味での始まりは、日米修好通商条約が結ばれた安政五年（この年、アメリカのほかに、オランダ、ロシア、イギリス、フランスとも「安政五カ国条約」が結ばれました）を幕末と捉えてもよいと考えています。またこの条約締結により、安政六（一八五九年）年横浜が開港されました。

――海外風俗の伝播 たばこ・酒――

開港した横浜には、海外からの外国人も日本人も多く訪れました。当時の江戸の人々にとって、横浜における外国人の風俗は大きな関心事になりました。そうした人々の欲求に応えたものとして、「横浜絵」と呼ばれる浮世絵が売り出されて人気を博します。この横浜絵は、浮世絵師が外国人を実際に見て描いたものもあれば、輸入された本の挿絵を参考に想像で描いたものもありました。

横浜絵は大きく二つに分類できます。外



図1 横浜の外国人居留地における酒場の風刺画
C. ワーグマン画 1862年ごろ

国人の風俗を描いた絵と横浜の町の様子を
描いた絵です。特に外国人の風俗を描いた
作品には、たばこに関するものが多く興味
をひきます。それまでの日本では、髪の毛
ほどの細さに刻んだ刻みたばこを煙管に詰
めて吸うスタイルが一般的でした。それに
対して、クレーパーパイプと呼ばれる素焼きの
パイプや葉巻を吸う外国人の姿は、絵師の

目にとっても印象深く映り、これらの絵が多
く描かれたのでしょう。

もうひとつ代表的な嗜好品として、お
酒があります。タウンゼンド・ハリスの
『日本滞在記』には、当時幕府役人への贈答
品として、ブランデー、シャンパン、シェ
リー酒、その他各種リキュール類を渡した
と書いてあります。

横浜には外国人を対象とした酒場が多く
ありました。その様子は、イギリス人画家
チャールズ・ワーグマンの風刺画にも描か
れています〔図1〕。彼はイギリスの新聞『イ
ラストレイテッド・ロンドンニュース』の
特派通信員兼契約画家として幕末の日本を
紹介しました。横浜に外国の艦船が入る
と、水兵たちはみな外国人居留地内の酒場
に集まって酒を飲みゲングデンになって
いました。こうしたことから開港後になら
ぬ洋酒がわが国に伝えられ、江戸にも伝
えられたと想像されます。実際、幕末期の
近世遺跡からは、ワインボトルやジンボト
ルが発掘されています。

—— 幕末期の洋風建築 ——

続きまして、近世・近代の考古学研究で

は建築物からの視点が重要だと思いますの
で、幕末から始まった洋風建築について簡
単に見ておきたいと思えます。

洋風建築が主な画題として描かれるよう
になったのは明治維新以降です。これは明
治維新を迎えるまで、一般の日本人が横浜
の外国人居留地への立ち入りを制限されて
いたためだと考えられます。横浜の吉田橋
には、明治四年まで関門という関所的なも
のがありましたが、明治四年以降は日本人
も自由に出入りできるようになり、それ
にともない居留地内の建物が多く描かれるよ
うになってきたのでしょう。明治になると
東京の築地でも洋風建築の建設が始まって
います。幕末から明治初期、時代を象徴す
る洋風の建造物が浮世絵の題材として取り
上げられたのは、いま、東京タワーが昭和
三〇年代を象徴する建造物として取り上げ
られるのと何かしらつながるところがある
ように感じられます。

さて、では当時の日本人、特に日本人の
建築家、あるいは建築業界に携わる人間
は、洋風建築に技術的な分野でどのように
関わっていたのでしょうか。建物自体の設

計は、明治初期、お雇い外国人が設計したものが多くあります。これは幕末でもそうだと考えるのが自然だと思えますが、細々とした造作などについては、案外、日本人の建築家が関わっていたのではないかと

思っています。ただ、その辺に関する史料がなかなか見つかりません。昨年末の『読売新聞』の記事「横浜の外国人居留地遺構本調査」二〇〇七年二月（四日）によると、今まで行われなかった、幕末、近代の重要地点、横浜の発掘調査が始まったとあります。これら考古学的調査により、洋風建築の構造や歴史が解明されるのではないかと非常に期待しています。

このほか、幕末期において江戸の市中、御殿山（当時の感覚では市街地）に洋風の建築物が建っています。品川宿に近い御殿山に各国公使館が建設される計画がありました。これは、幕末の攘夷運動の高まりのなかで相次いだ外国人殺傷事件（タウンゼンド・ハリスの通訳兼秘書を勤めていたヘンリー・ヒューステン

の暗殺、イギリスの公使館が置かれていた東禅寺を水戸浪士が襲撃した事件など）により、諸外国が安全な公使館の用地を御殿山に設けることを幕府に要求したことに始まります。

公使館の敷地は、イギリス、フランス、アメリカ、オランダの四カ国に割り振られました。イギリスの公使館の建設が始まったのが文久元（一八六一）年十一月。翌、文久二（一八六二）年一月には、ほぼ建物は完成しましたが、完成間近のイギリス公使館は、文久二年一月二日に高杉晋作、伊藤俊輔（後の伊藤博文）、志道聞多（後の井上馨）ら長州藩士によって焼き払われてしまいました。その結果、御殿山に外国の公使館を建てるという計画は頓挫、完成を見ることはありませんでした。

東京大学史料編纂所や東京都立中央図書館の東京誌料文庫に収蔵されているこのときの建設計画（各国公使館の平面図、立面図等）を見ますと、すべて洋風建築物として建てられることになっていたことがわかります。これらの洋風建築物の図面は、当時、幕府

の作事方の大工頭に属した大棟梁、辻内近江が作成したようです。これにより少なくとも、この御殿山の外国公使館の建設に際して、日本人建築家、建築業者が携わっていたことが確認できます。

公使館の建築は、当然外国人建築家の指導を受けていたと思われれます。今日でいえば清水建設といったような、大手ゼネコン的立場にあった幕府作事方に属する建築業者が、このように洋風建築で建られた建物の建設に携わったということは、後の明治に建てられた洋風建築の建築技術習得に、日本人がどのように関わっていたのだろうかという点で、非常に興味を覚えるところだと思います。私の発表はこれで終わります。

ただ・ゆうし

一九五八年東京都生まれ。國學院大学文学部史学科卒業。たばこと塩の博物館主任学芸員。日本女子大学非常勤講師。共著に『江戸の食文化』（吉川弘文館、一九九二）ほか。

港区の調査事例から見る
近世から近代への変化の一樣相

港区立港郷土資料館

毎田佳奈子



今日は、港区北部における武家地の三カ所の遺跡を主に取り上げます。「津和野藩亀井家屋敷跡遺跡」では非連続性を、「旗本柴田家屋敷跡遺跡」[No.19遺跡]では土地利用における連続性を見ていきます。その三遺跡の位置と近代における変化のさまざまな事柄とを考え合わせながら、変化の背景を捉えたいと思います。

— 津和野藩亀井家屋敷跡遺跡 —

津和野藩亀井家屋敷跡遺跡は、江戸城から南西約四キロメートルに位置しています。現在は南麻布五丁目、都立中央図書館のすぐ南にあります。麻布周辺は下屋敷、

中屋敷が多かった場所です。

幕末の絵図によると、ここは江戸時代には旗本松平家の屋敷でした。遺構全体図によると、掘立柱建物を中心とした空間であったことがわかります。一部、敷地の両端あたりに塀の跡、井戸が数基、地下室、土坑などが発見されていますが、基本的には調査区すべての場所で建物跡が検出されていません。

次は明治四二年の図を見てみましょう。この場所には内閣統計局が敷地を持っていました。建物は、川原石、丸石、切り石等を主体とする礎石群で構成されていて、それを大型の円形または方形の掘り込みの中に詰めるというのが基本的な建物の基礎でした。一部煉瓦基礎でつくられた、洗濯室の基礎が見つかっています。煉瓦はイギリス積で積まれています。建物の礎石に並行するように、煉瓦の下水溝が確認されていて、そこから土管が接続されています。煉瓦では、煉瓦製造会社を示す上敷面製、または桜の蕾の刻印などが確認されています。

このように一期と二期との間には、一九世紀第三四半期を廃絶年代とする遺構があ

まり見られないわけです。一八九〇年代以降のクロム青磁の椀の破片は数点見つかっているのですが、一括資料のなかにはほとんど含まれていません。年代的に非常に薄い状況と言えます。また、二期の遺構の特徴として挙げられるのは、近世の陶磁器を含まず、近代の遺物群で構成されていることです。インク瓶が多量に出土しています。また、統計局と銘が打ってあって二重線が入った椀も出土しています。このように見ていくと、当遺跡においては、明治初頭から明治四二年ぐらまでの間は、積極的な土地の利用は行われず、土地利用における非連続性が見られると言えます。

— 旗本柴田家屋敷跡遺跡 —

次は赤坂六丁目、旗本柴田家屋敷跡遺跡の事例です。周辺に旗本の屋敷が多かった場所だと絵図からわかっています。柴田家は五千五百石取りの旗本で、幕末以後明治初頭までこの場所にいました。その後、明治五年に勝海舟が柴田家から屋敷を購入し、明治三二年に亡くなるまで居住していたということがわかっています。

出土遺物の廃絶年代などから、江戸時代

に建てられた建物と明治時代に建てられた建物とでは石の配置の仕方が異なることがわかります。川原石を三点並べる三類(幕末、明治五年頃)以後、五、八、九類という並べ方の礎石群が展開するようになります。

勝海舟は明治五年に柴田家から屋敷を購入した後に増築します。それほど変わらない建物規模で、似た感じの礎石を使用して増築しました。

さらに近代、海舟の死後に家を改築したことが文献調査でわかっています。幕末・明治にかけては大きな変化はないものの、明治時代になって軸線の変化が捉えられています。

このような建物群を中心とする遺跡では、遺物があまり得られません。この遺跡でも一括資料がなく、年代的なものを土坑から追うことが難しい。ここでは包含層から出土した遺物の年代観を見ておきたいと思います。幕末から明治三五年ごろまでの確認面を構成するⅡ層の出土遺物は、おおむね江戸時代までに収まる年代観をもっています。それに対し、明治三五年の確認面をパツクするⅠ-3層は、江戸時代の遺物も含みながら、若干、近代以降のものが

加わり、年代的に緩やかに下っていくという様相が捉えられています。こうした遺物の年代観や遺構の分布から見て、この遺跡は、土地利用の面で江戸から明治の連続性を表していると言えます。

— No.19 遺跡 —

次の事例はNo.16遺跡です。ここは愛宕下と呼ばれる西新橋二丁目に位置しています。江戸城の南、約二キロメートルにあり、旗本の屋敷が多かったことが知られています。No.16遺跡には、幕末には丹波の旗本川勝家、佐倉藩堀田家の屋敷などがあつたことが文献調査で明らかになっています。実はこの遺跡では、近代についての遺構分布の検討が行われていません。しかし、遺物は一括資料を中心にしつかりと報告されていますので、遺物の年代、器種組成から、土地利用のヒントを読み取ってみたいと思います。

古いほうから見ていきますと、木材集中土坑、集中域から多量の木材と一緒に出土した遺物群が見られます。年代は、初期段階の瀬戸・美濃の端反椀、備前の皿、広東椀、瀬戸・美濃の徳利等々が見られ、おお

むね一九世紀第一四半期までの遺物群と考えられます。器種組成を見ると、衣食住に関するさまざまな器種があり、蓋物、皿、徳利、ここには調理器の行平鍋の蓋などが出土しています。乗燭、灯りの道具、植木鉢、火鉢、連歯の下駄、草履、箸です。このあたりは玩具、碁石、砥石などが出土しています。このように、生活道具に関わる多種多様な器種が出土しています。

上の層の遺物を見ますと、井戸から出土したものがあつます。銅版絵付、コバルト染付の碗、型紙刷りの紅猪口、明治初頭に出てくる鉄文字の徳利などです。面白い資料として、井戸に落ちていた釣瓶には「七番地長屋中共用」と墨書がありました。この場所が七番と呼ばれていたのは、明治九(一八七六)年から大正一〇(一九二二)年のころです。あとは明治一八(一八八五)年鑄造の銭が出ています。このほかにビール瓶なども出土しています。

次はさらに上層の遺物です。この場所は明治二〇年以後震災で焼けていまして、その時の焼土層が確認されています。この時期になると、器種が少なくなり、全体量が減っていきます。

遺物からその土地利用を推測しますと、江戸から明治二〇年ごろまでの出土遺物は生活道具を主体とすることから、居住者が大きく変化することがなかったと推測できます。そしてこの明治二〇年を画期として、仕事道具である分銅銅貨が混ざってきます。こうした様子から、この時期にZ.O.G遺跡が生活の場から仕事場へと変化したことが考えられるわけです。

――三遺跡の位置と変化の方向――

以上、三つの遺跡を見てきたわけですが、土地利用の連続・非連続という点で、江戸城に近いZ.O.G遺跡、旗本柴田家屋敷跡遺跡では連続性が見られ、江戸城から遠く離れた津和野藩亀井家屋敷跡遺跡では、四半世期の空白期間が見られたわけです。同じ武家地でこのような差が出てくるのはなぜでしょうか。その背景を考えるうえでやはり大きいのは、明治五年の鉄道の開通です。鉄道は新橋駅を起点として南の品川駅へ伸びており、そのため新橋駅周辺はおのずと開けていったのでしょう。また、

東京では初のガス灯が、金杉橋を起点として京橋まで八五本設置されました。

例えば港区では、近代初頭教育発祥の地で、増上院の子院の源流院がありました。学制発布以前に六つの小学校が設立されたと言われているのですが、その第一校目が現在の慈恵医科大学があるところです。明治一七年から始まる看護婦教育発祥の地とも言われ碑が立っています。

虎ノ門一丁目には、初めての大衆紙、現在の読売新聞が創刊された記念碑が立っています。

明治二一（一八八八）年に立地された東京天文台があった所では、日本の緯度経度の原点があります。天文台は観測上、暗さが必要なので、設置された当時はおそらく暗い場所だったのではないかと思われます。それが大正一二年には早々と三鷹に移転しておりますので、その頃にはずいぶん都市化したのだらうと思われれます。

このように港区内では近代的な動きは新橋を中心に起こっています。虎ノ門付近では新聞、洋家具商である芝家具製造が地場

産業として発展していきます。また、溜池方向へは写真、薬品、印刷等の新技術の商業地化が進んでいきました。千代田区側では、霞ヶ関や虎ノ門付近は現在もそうですが官公庁が多く立地していました。

以上のような近代の動きと今回取り上げた三遺跡の様子を重ねあわせると、政府の施設や商業地からの距離の近さ、遠さの影響により、同じ武家地であっても明治時代における土地利用には違いが生じたことが考えられるわけです。近代に官公庁や商業地として早くから利用された新橋・虎ノ門近辺にあるZ.O.G遺跡、旗本柴田家屋敷跡遺跡では土地利用に連続性が見られましたが、新橋・虎ノ門からやや離れた津和野藩亀井家屋敷跡遺跡では四半世期の空白期間が見られ、土地利用に非連続性が見られたわけです。

ご清聴ありがとうございました。

ました・かなこ

一九七二年大阪府生まれ。駒澤大学文学部歴史学科卒業。専門は近世考古学。

土管でつながる江戸から明治

— 豊島・新宿・千代田区の事例から —

千代田区立四番町歴史民俗資料館

水本和美



— 記憶と記録、連続性と非連続 —

新聞やテレビでは時折、昔の水道管やガス管が破裂したというニュースが流れま
す。現在は管理会社などが決まっています
から、自分の住んでいる地域のガス管・水
道管がどこに埋まっているか知りません。
しかし江戸時代の人は、自分の住んでい
る場所の地面についてよく知っていたの
ではないかと感じます。このことは、江戸東
京の連続性・非連続性という問題に関係す
るのではないのでしょうか。そういったもの
の記憶あるいは記録について、私は大変注
目しています。

●新宿区四谷三丁目遺跡

最初の事例は、新宿区四谷三丁目遺跡で
す。この遺跡は江戸時代の大縄地で、丸の
内線の四谷三丁目駅付近です。

ここでは遺構群が出てきました。大規模
な地下室の一群と建物跡と思われるピット
などが見つかっています。

図1(次頁)をご覧ください。土蔵が上
方にあつたと考えています。石を使った建
物基礎で、地下室を使い終えて土を埋め戻
し、三〇号としました細長い長方形の掘込
みをつくり、そこに石を据えています。

石を据えたその脇を「版築」で上まで固
めています。このときに使っている土が関
東ローム層、つまり地山になります。ここ
で土蔵の基礎をつくったのではないかと考
えました。下の土に含まれていた遺物は
一八世紀の中ごろのものでした。上の版
築層には、おそらくここに由来している同
じ年代観、同じような器種組成を持つ遺物
が入っていて、それらとともに若干新しい
時期(九世紀)の遺物が含まれていました。
ですから、この地下室を使い終わったあ
と、一九世紀初頭に建てられたものではな
いかと思います。

礎石は切り石、直方体などを何段かに積
んだ構築方法です。いちばん深い穴が掘ら
れています。その深い穴ばかりの所をあえ
てもう一回しっかりした基礎構造につくり
替えているということや、出土遺物などか
らして、この場所は江戸時代中期ごろから
一九世紀の幕末ごろのものと思われる。
地下室から土蔵の空間へという変化のな
かで、建物とつくり方はかなり変化してい
るのですが、空間利用のあり方としては、
あまり変化はしていないと思います。

もう一つは、地下室がどのあたりの年代
まで下ることができるかを考えてみます。

三〇号遺構に隣接して、四六号遺構と
いう、腰ぐらいいまでの深さの遺構があり
ます。ここからは幕末、ヨーロッパ製の
「ALBION ROSE」と書いてある陶磁器が出
土しています。一八六一〜一八七一年ごろ
に、イギリスにあつたアルビオン窯のロー
ズ・パターンであることがわかりました。
礎石の廃絶等から見て隣の四六号遺構と土
蔵はもしかしたら同時に存在したのではな
いかと思います。土蔵自体はもしかすると
本当に幕末ぎりぎりの時期まであつたので
はないかと考えています。

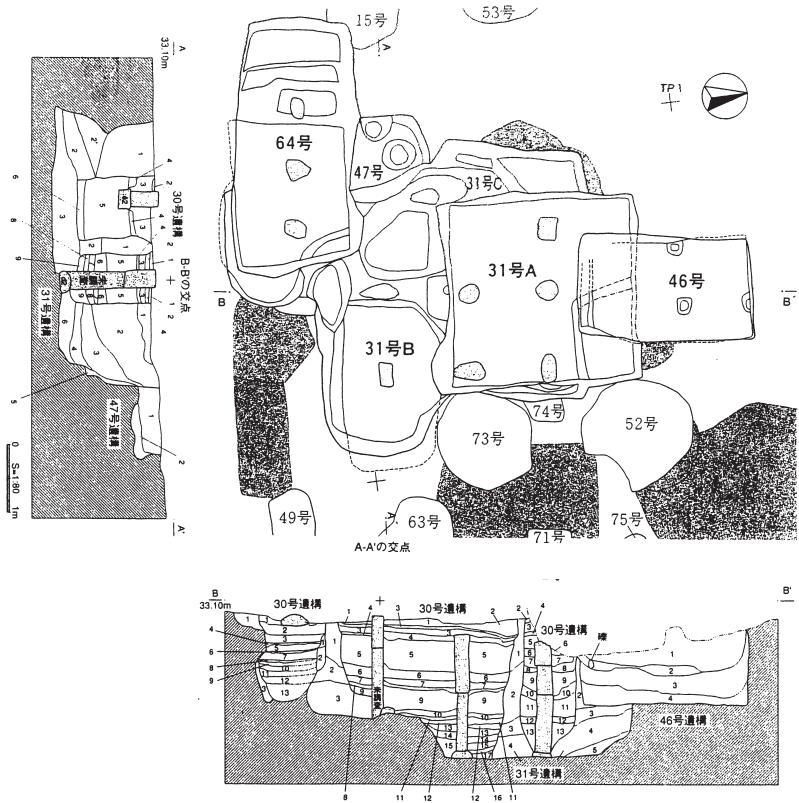


図1 30号・31号・46号・47号遺構平面図・断面図

ところで、土蔵を建てることのできるのは結構富裕な人々といえます。そして、ローズ・パターンの皿、ヨーロッパの製品が出土したことは、この時期、富裕層は高級な食器を使っていたのではないかと考えられます。また、この陶磁器は割れを補修

した跡があったので、大切に使用されていたと思われます。同じ遺構からは煎茶道具なども出ています。幕末の文化的なあり方を示しています。

江戸時代、このような大きく深い穴は江戸中にボコボコと開いていましたが、これ

を埋め戻すときには、次の使い方をよく考えて、次の遺構がつけられているのです。こうした例は、豊島区の駒込駅に近い駒込一丁目遺跡でも見られます。ここも先ほどの四谷の例と同じように地下室を次の段階で建物の空間に変化させています。そうした空間につくり直すのに、おそらく関東ロームという地山を掘りながら探していくのではないかと思います。掘ってロームの底面まで行った所で止めて、基礎を据えるというやり方は四谷三丁目の例と同じです。石は大谷石です。

一九世紀初頭の廃絶と考えられる地下室は、一八世紀後半からの遺物を含んでいます。江戸から近代の間に、四谷で見た江戸時代中に変化したやり方と同じやり方で基礎構造をつくっています。

以上、地下室から土蔵という変容のなかで、土地空間の利用のあり方としては連続性がうかがえ、なおかつ工法は変化があるということが言えるのではないかと思います。

●南町遺跡

南町遺跡の事例では、礎石建物をつくるときに、深い遺構に当たってしまったら深

くまで礎石を据え、浅い遺構や地山るときには浅く埋めています。要するに下の地面をよく知っていたのだと思います。

少し違う例の話をします。新宿区の戸塚村の名主を務めた中村家は尾張藩の上屋敷に出入りして、屋敷のいろいろな作事や下肥の掃除などをしていました。ここの文書に、尾張藩邸内で畑づくりを命じられて土地を開墾したところ、瓦や石が埋められていた場所を掘り起こすことになって非常に大変だったと訴えたものがあります。江戸を発掘している人はよく瓦だまりなどに当たることがあります。土より瓦が多いくらいで掘るのに大変な思いをすると、弘化四（一八四七年）のこの文書には書かれています。ある場所になにかを埋めた記憶が、江戸時代中といったんは忘れさられ、それが改めて同じ江戸時代に記録されたという史料の例です。

踏襲されやすい遺構は、タイトルにもした土管、溝状遺構です。溝状遺構は、地境や敷地の区画を表わす遺構としてつくられることが多くあります。巢鴨遺跡のアーバンパレス地区の溝状遺構は、いちばん左手のほうに南北に溝状遺構が走っています。

て、何度も踏襲されてつくられている様子がわかります。

ほかにも上水や下水のラインは踏襲されやすく、例えば四谷の下水道などは本来両側面に石組み溝があるべき所を、近代の鉄管が走っています。これは同じ場所を踏襲しているからだと思います。

珍しい例として、幕末期にはかなりヨーロッパの製品が日本に入ってきていました。ワインボトルなども入ってきたと谷田さんもおっしゃったのですが、江戸時代には徳利に釘書きという屋号を入れたものがありました。徳利はその後鉄文字の徳利に変わっていき、最終的には一升瓶、衛生という観点からガラス瓶に変わっていきます。瀬戸・美濃の徳利に「□に大」と書かれているものが遺跡のなかにありました。この付近のお店の人が屋号を入れたのではないかと思うのですが、幕末の面白さです。

● 蚊遣り豚(かやりがた)

江戸時代の出土資料に、蚊遣り豚があります。その形の元は、江戸時代の徳利のようで、蚊遣り豚として徳利が吊されている

様子が描かれています。徳利を横倒しにすると、口の部分が豚の鼻先のようにです。こういうものが江戸時代にもあって、蚊遣り豚ならぬ蚊遣り象のようなものが描かれています。

別の絵には子豚が二匹描かれているものがあります。おそらく異国風ということを表わすのに象という意匠が使われたのではないかと思えます。それぐらい豚形の蚊遣りは一般的に認知されていたようです。

こういったものがどんどん変化していきます。大正時代の広告など見ますと、殺虫の概念を謳ったものが出てくる。蚊をよけるという概念から殺すという概念への意識の変容が見られるわけです。

遺構にもモノにも連続性と非連続性があり、現在があるのです。これで私の報告を終えたいと思います。

みづもと・かずみ

一九七一年東京都生まれ。國學院大學修士課程修了。豊島区遺跡調査会(調査員)、新宿歴史博物館(非常勤)を経て現職。論文に「消費地遺跡出土の鍋島」「近世都市江戸と遊興地」(修士論文)。編集に「尾張家への誘い」(新宿歴史博物館特別展示図録)。大会報告に「陶磁器からみた江戸のはじまり」(江戸遺跡研究会大会報告)。

町人地・武家地の江戸から明治

— 日本橋・京橋地域を中心に —

中央区教育委員会

仲光克頭



町屋遺跡のひとつの基準となる日本橋一丁目遺跡を幸いにも発掘する機会に恵まれましたので、今日はこのことを中心に話していきたいと思えます。

— 土地利用からみた連続性と非連続性 —

●町人地

町人地の連続性については、結論から言いますと、「江戸は江戸」、つまり連続していると考えています。実際、日本橋一丁目遺跡で発掘調査をしてみますと、明暦の大火（二六五七）から関東大震災ぐらいまでの「生活面」が積み重なった下水の護岸が出てきます。たいてい石は時の経過とともに

転用されてなくなっていくものですが、おそらくこれが町屋の地境を成していたのでしょう。この遺跡に関してはそういうことがなく垂直に積み重なっています。

●武家地

いま、遺構の連続性について述べましたが、では、土地利用からみた連続性・非連続性はどうか。結論から言うと武家地に関しては非連続です。というのは、明治六年の太政官布告で大名屋敷が収公されて武士がいなくなるからです。幕臣である旗本、御家人たちには明治元年前後の東京府知事の布告によって、屋敷地を減らすよう通知が出されました。ですから、維新の直後からすでに武家屋敷に関しては、移行が進行しているということがわがれます。

●外国人居留地

近代の遺構というのは、ついでに掘られることが多くあります。中央区明石町には東京で唯一の築地外国人居留地があります。そこは江戸時代であれば豊後岡藩（現在の大分県竹田市）、中川家の上屋敷があったと

ころです。つまり、中川家の遺構を掘るところが第一の目的で、ついでに居留地の発掘調査が行われました。東京では居留地は実際に掘られたことがなく初の事例でした。

外国人居留地というのは近代の遺構なので、考古学的には対象外という気もしていたのですが、掘ってみると、今のわれわれからみてもかなり異質な様相がうかがわれました。

外国人居留地は、すでに幕末の段階で、幕府の政策によってこの場所に開くことが決定されていました。つまり、歴史的には連続性のある事柄だったのです。しかし考古学の側面から見ると、土地利用としてはまったくの非連続であると言えます。ちなみに、慶応二（一八六六）年の火災で、中川家の上屋敷は全部壊れるのですが、その直後に建て替えて、明治維新を迎えてから、また新築同然の状態で取り壊されます。取り壊しを行ったのが中央区発祥の建設業者、清水組でした。

ここには明治五年までエーデー・ヘーヤという英国人が入り、その後、明治五（一八七〇）年にフランス人のア・ハーブルが居住します。エーデー・ヘーヤの居住の実態は確認

されていませんが、ア・ハーブルについてはその家から出たであろうゴミが出土しています。

外国人居留地は四五番、四六番、四七番の一部を掘りました。その敷地境に囲われるようにきつちりと近代の建物跡が出ています。またア・ハーブルが転出した明治八年以降に入るのが、現在の雙葉学園の前身であるサンモール修道会です。サンモール修道会は四七番の土地を持っていましたが、次第に建物を増やしていきます。当然古いものを壊して新しいものをつくるわけですが、それをわれわれは「遺構の切り合い関係」と呼んでいます。その切り合い関係によって遺跡のゴミ穴の新旧関係も確認できました。居留地が廃止されるのは明治三二（一八九九）年です。

―― 遺物からみた連続性と非連続性 ――

●日本橋一丁目遺跡（町人地）

日本橋一丁目遺跡は町人地です。近代遺構の面と幕末遺構の面が見られます。一八世紀末、明和九（一七七二）年の目黒行人坂の火事の図があります。その図では現在の東急別館のあたりは攪乱が激しくて残っていない

ませんが、土地利用は変わっていないことがわかります。

積み重なった下水の様子を見ますと、一段分が、およそ一五～二〇年前後の堆積になっています。明暦の大火前後、一六五〇年前後の堆積した部分や関東大震災の土があることも分かります。

ちなみに、この遺跡は家康が入府した直後からあります。

日本橋一丁目からやや南の日本橋二丁目遺跡では、江戸時代の石組の下水の真上に土管がみられます。この石組の下水は一八世紀末のものですが、その上に同じように土管があります。換地位置決定図という関東大震災前後の権利を書いたものがあってこうした地割りが裏づけられます。

●上野公園

加藤益五郎という台東区在住のアマチュ

アカメラマンが撮った関東大震災直後の

上野公園の写真には、木造の簡易な建物と下水木樋が写っています。下水木樋には、われわれがちぎり状の木製品と呼んでいる、樋をつかて留める切り込みが残っています。以前からあった簡易的な技術は、こ

ういう震災のときにすぐ使える技術として残っていたのだらうと思います。

建物の端には台所があり、下水枝樋と呼んでいる流しが見られます。

●横川一丁目遺跡

横川一丁目遺跡の三面は長山工場になっています。墨田区は明治初年から早くも工業用地として使われていました。大横川の水を使った染物工場があって、錦糸町駅北口遺跡の二次調査では、明治二〇年代に廃絶された池から東京染物会社という木の札も出ています。

銅板転写が長山工場辺りから出土しています。銅板でエッチングし、それを腐蝕させて転写するというものだと思います。一号遺構以降は明治三〇年代ごろと想定しているのですが、もう少し時代は下るかもしれません。このころになると完全に型紙作り、銅板転写も入ってきます。

三田土ゴムは、現在の昭和ゴムの前進です。われわれより少し上の世代が使っていた、赤M（アカエム）ボールという軟式テニスボールを作っていた工場です。

これらが近代における変遷です。

●日本橋蛎殻町一丁目遺跡(武家地)

次は武家地について、日本橋蛎殻町一丁目遺跡の話をします。ここに山崎藩本多肥後守、二万石の大名の上屋敷がありました。庭園と御殿の間の役宅の隙あたりに簡素な建物が建っている部分と大規模なゴミ穴が集中しています。近代に入ると比較的大きなゆつたりとした建物や土蔵跡のようなものが出てくるようになります。

近世末に、長屋のような礎石建ての簡素な建物があつて、下水木樋によつて仕切られたことが分かります。

日本橋蛎殻町一丁目遺跡は、明治六年になつてもまだ存在した、井上河内守という浜松藩主の上屋敷です。おそらく収公後、屋敷地を持つてもいいよと言われたのが、この蛎殻町だったのだらうと思います。それがいつ転出したのかは文献調査からもわかりませんでした。ここから出た小坏がまるつきり変わっていました。それまでのものは非常に背の低いものが中心で、人工コバルトで絵付けされていました。武家屋敷なので酒ばかり飲んでいまずから、徳利があります。そして鉄絵もある。迷子札には、井上河内守家中云々と書いてあるの

で、おそらく年代的にも井上家から出たゴミであることは間違いありません。

明治一〇〇〜二〇年代ごろの遺物に、先ほどの銅板転写などが出ています。大正年間以降の植木鉢が大量に出土しています。

近代の便所の中を掘ると、たいいてい銭が埋納されています。明治一〇〇〜一八年の銭なのでだいたいお時代は下るのですが、便所の神に捧げたものだと思います。銭ががま口財布の中に入った状態で、土人形と一緒に埋納されていました。ほかに、胞衣埋納遺構とよんでいる遺構があります。後産の胎盤を、人のよく歩く路地の土中等に埋めるのです。江戸時代から同じ習俗が見られるので、地下に営まれる習俗として、近代以降もそれほど意識は変わってなかったのではないのでしょうか。

●築地外国人居留地

築地外国人居留地では東京一致神学校、今の明治学院大学の建物、浦堀橋、鉄砲洲が見られます。下水は、明治二三〜二五年に、外国人が石組みの下水は詰まりやすいので、V字の下水に替えろと言つて替えましたようです。そういった文書が出てきま

した。

フランス人、ア・ハーブルの遺物は、明治五〜八年、明治八〜二十一年、明治二〇年代と、敷地境がきれいに分かれています。初めに四七番地を購入して増築しているからで、遺物は四五番地に捨てられています。増築した建物の直下には三九六号遺物があるのですが、これとまったく同じものです。敷地全体を購入した後に捨てたであろうことが、陶磁器から明らかになります。

今日の発表では、幕末から近代の遺物の話をするはずでしたが、ほとんどは近代の編年に近くなつてしまいました。外国人居留地、蛎殻町一丁目、墨田区横川一丁目の遺物の変遷は年代が書いてあるのでそれを見ればわかります。人工コバルトは明治六年以降に使い始められたようです。それから、碗と徳利の数を調べますと、時代を経るにしたがつて徳利は減ってきています。

ここに遺物の年代があります。ア・ハーブルの遺物は、先ほどの慶応二年の中川家の遺構からも出土している、篆書文と言われる染色体のような文様のものが引き続きみられます。

一群の西洋陶磁器は、量的には国産が多いのですが、出土したものはたぶんフランス製かもしれない。パリジャンと書いてあるお皿やカップとソーサーがセットで出ている。

ワインボトル、ジンボトル、ソーダ瓶も出ましたが、同年代の町屋ではこれほどまとまって出土することはありません。パン(平鍋)と洋庖丁であるうとみられるものも出土しています。紋様を正面にみたときに、右手でナイフを、左手でフォークを持つので、傷跡が付いているようです。

ハーブルの土地からは湯呑碗が大量に出ました。外国人居留地は、中国人の使用人が多く、その人たちのためのものだと考え

ています。そういう意味では何か武家屋敷とあまり変わらないような気もしますが、明治一桁の年代です。

明治八年〜二十一年の建物からは、清朝磁器の湯呑みが大量に出ています。ここは日本人孤児、児童、白人の通学生もいたらしいのですが、石筆、石版に日本名で名前が書いてあったり落書きがしてありました。(谷田氏の話にあったクレイパイプももちろん出ています。

明治二十一年には、圧倒的に西洋陶磁が目立つ様相になってきます。そして、江戸っぽいものがまだ残っている状態ですが、明治二〇〜三二年には、銅板転写になって、磁器に江戸っぽいものはまったく見られな

くなってしまいました。そういったことが変遷からうかがえます。

屋根の瓦についても、少し話をしておきます。瓦は年号で一八八六や一八七八と入っています。雙葉学園の前身があったときの年代です。横浜のアルフレッド・ジェラルドというフランス人が機械製造で作ったいわゆるジェラルド瓦が、すでに使用されていたようです。
発表は以上です。

〔編集者要約〕

なかみつ・かつあき

立正大学大学院修士課程(考古学)修了。二〇〇〇年より現職。

日本工業大学
波多野純



実は私は、この会場には思い出がありません。一五年ほど前に「江戸遺跡研究会」という学会がここで開かれ、建築史の立場からお話したことがあります。そのころから考えると、大きく変わったというのが実感です。

というのは、二五〜三〇年ぐらい前から谷川先生をはじめ小林克さんたちがみんな苦勞をなさって、やっと最近になって近世考古学が認知されてきました。それがもう近代まできた。この二〇年の変化というのはものすごいことなのです。考古学の王道は古代・中世にしかなく、近世なんかを研究するのは意味がない、はみ出したやつしかやらないと言われていた時代から、近代まできたというのは、かなり重い実感

です。そのなかで今日のテーマの連続性・非連続性というのが、いかに難しいテーマだったかを、お話を聞きながら強く感じました。

一般的な連続性・非連続性とは違って、江戸東京というのが頭に付いてしまうと、明治維新によって薩長政権が成立し、そこで連続性が失われるという基本的なイメージがともとあります。それに対して、少なくとも住んでいる人間は変わらないのだから連続しているのだといっても、具体的に溝を埋め、実証してゆくのは難しい作業です。

谷田さんが最初にお話くださったなかで、洋風建築物の図面が幕府の大棟梁によって描かれたとありました。このあたりが今回の重要なポイントです。つまり技術の連続性は確実にありました。これは藤森照信さんの受け売りですが、松本の開智学校の「開智学校」と書いてある看板は、キューピットが持っているのです。ところが当時は、キューピットというのはノンセックスであることを知らなくて、横浜の三流新聞のタイトル装飾をまねて付けてしまったために、あのキューピットは男の子

になっているそうです。つまり連続性というのは、結構面白いところでつながっていくのだな、という実感を持っています。

技術の連続性、あるいは人々が生きていくことによってつながる連続性というところで、例えば毎田さんがお話くださった、新橋といういちばん最先端の場所のほうがあるかに連続性があるという指摘は、まさに先ほどの谷田さんのお話とつながっていくように私には聞こえました。人とのつながりなしに遺物はないのだと、実感として非常に面白く思いました。

水本さんのお話の大変重要な部分として、境界線の話がありました。境界線というのは、考古学で証明していただく大変重要なポイントだと思っています。例えば私たちが、建築の歴史で江戸の都市史をやる。そうすると、例えば江戸の地図や、土地の権利関係を書いた沽券絵図を扱って、それが現実のいまの地図とどこまで合うかをやるうとしたときに、少なくとも考古学的な保証がない限り、かなり怪しい議論になってしまふ。それが考古学によってきちんと保証されていくことによって、土地の権利というのは、そう簡単には動くもので

はないことが分るわけです。だから動くときには、それなりの理由がある。それを発見しない限り、きちんとした研究にならない、これはとても面白いことです。

仲光さんのお話のなかで、町人地は基本的に連続性を持ち、武家地は断絶をするのだとありました。この理解は、皆さんの発表に共通するようです。そのなかで、逆に番町・麹町、いまの千代田区四番町資料館がある辺りは、かなり連続性があると理解しています。なぜかという点、東京都公文書館に、「旗本上ヶ屋敷図」という図面が、二百数十枚残っています。一三〇余の旗本屋敷の平面図が揃う貴重な資料です。その中に番町・麹町あたりの旗本屋敷の図面が

たくさん出てきまして、それはもう現代の地割まできれいに連続します。なぜそんな資料が残っているかというと、江戸幕府が集積してきた旗本屋敷の図面を、明治政府が今度は高級役人の住宅として転用するために整理をした結果です。きわめて連続性があります。

ただ、景観には非連続部分があります。江戸時代に、旗本屋敷のあたりの道に面しては、塀と長屋門しか見えず、決して緑豊かな景観ではなかったと思います。それが明治のはじめの桑茶政策、つまり桑やお茶を植えることによって、高級住宅地としての緑がそこで突然生まれました。土地利用は変わるのだなという典型です。

そういう意味で、今日は連続性と非連続性をいかに理解するか、江戸から東京に変わるときに、何が変わって、何が変わらなかったかということに関して、普通の人たちが普通に生きてきたことが連続性だという非常にいい答えをいただいたと思います。楽しく、面白く、拝聴しました。

はたの・じゅん

一九四六年神奈川県生まれ。東京工業大学卒業。日本工業大学教授。波多野純建築設計室代表。著書に『復原・江戸の町』筑摩書房、一九九八、『江戸城（2）待屋敷』（至文堂、一九九六）ほか。日本建築学会賞（業績・共同）、建築史学会賞受賞。

質疑応答

司会(小林)——会場の両角さんから、「遺構、あるいは一括遺物の年代観を得るための指標となる遺物は何でしょうか」という質問が仲光氏、水本氏、毎田氏の三人にきています。回答に入る前に発表の補足的な発言をお願いします。

毎田——今回の発表で武家地を見てきたわけですが、町屋の事例では、結論から申しますと、連続性が見られたという一言に尽きます。まだ江戸から明治にかけてのしっかりした調査ができないので、若干距離の離れた町屋の事例をここで紹介しておきます。

まず「三田台町」の町屋の事例ですが、土地利用分布を見てみると、おおむね小型のほぼ同様な大きさの遺構の展開が見られて、大きく変化を読み取ることはできません。また遺物ですが、こちらのほうは詳細な分析、観察表などは作られていませんが、江戸時代のものに若干近代明治期のものが加わっていくような様子が、見られ

ます。

「芝神谷町屋跡遺跡」は、先ほど紹介したNo.19遺跡の西側あたりに位置しています。これも町屋です。こちらでは下水木樋の設置場所に連続性が見られた事例です。

年代観についてですが、基本的には陶器・磁器の製品を中心に年代観を出しています。あとは釣瓶に墨書があったという資料もありますが、そのあたりに書かれた文字などから、年代を推定しています。

司会——ありがとうございます。次に、水本さんお願いします。

水本——まず年代観についてですが、江戸時代の遺構の年代決定については陶磁器・土器を用いました。例えば三一号の遺構の一八世紀初頭の遺物には、薄手で印判染め付けがされたものがありました。唐津の三島でも地模様が一七世紀後葉から出ているものがありまして、そういったところを根拠としています。

明治に入るか入らないかの時期については、コバルトの染付が入っているか、鉄文字の徳利が入っているかどうかで判断しました。一八世紀後半から一九世紀初頭の年

代観に関しては、瀬戸・美濃の徳利の形態変化から判断しています。一九世紀代の細かなところに関しては、瀬戸・美濃産の磁器の有無あるいは、瀬戸・美濃産磁器の端反碗などの形態変化等々を見ております。

さらに補足ですが、連続・非連続については、いくつか事例を挙げながら、江戸から明治にかけての空間利用の連続性と、形が変化しているところでは、形と意味はつねにセットで変化するのではなくて、形は変化しつつも意味は連続するということがあり得るということを検証しました。

毎田さんの発表のなかで、一時、明治初頭に空白期があるというところに興味を持ちました。少し空白を置いて明治の近代面が始まり、また、震災によっても明治から続く面は終わらずタイミング的には第二次大戦までその建物というのは続いたと思います。それは、支那事変記念という記念表が出ているところから読み取れます。そのあたりが一応連続ということで、明治から昭和初期までの連続が追えたということで、補足しておきたいと思います。

司会——ありがとうございます。仲光さんお願いします。

仲光——発表のなかで、徳利のことを話しましたがそれを補足します。鉄絵徳利は、生産地で文字が入れられます。ただ水本さんのお話にあったように、釘書きは江戸時代が中心です。墨書もあり、篋書きという江戸時代の徳利ももちろんあるにはあるのですが、量的には圧倒的に少ない。これは明治近代に入って販売店の意向を受けて生産地が反映するようになったものではないかと思えます。

一町人地に関しては、再三皆さんもおっしゃっているとおり、政権や政策による変容というよりも、自らの生活環境が周囲の変化によって緩やかに変わっていった程度ではなかったかという気がします。水本さんの発表にあったと思いますが、武家の移動によって、いわゆる武家門前町屋の移転が新宿にはあったらしいのですが、土地の町人は、困窮していったと言われています。これに関しては、新宿の町屋の事例もよく勉強していきたい。武家地は新政府による強制的な変容があったのですが、ただ入ってくる人間は同じ日本人なので、遺物的にそれほど変容はみられないのかもしれない。

横川一丁目を例に挙げたのは、江戸の縁辺部に当たる部分にもかかわらず、早くから工業化—近代化されていった一例ではないかと思うからです。中央区のような江戸の中心は、大きな工場が建つ歴史の流れではなくて、墨田区のような縁辺部の下町にそういう流れがありました。

遺物の年代的な指標については、形式的な変遷は、個々の系統性のある遺物についてそれぞれ検討を加えて行いました。また、水本さんの発言にもあった技術、人工コバルトによる変革や型紙刷りから銅板転写に変わるといった定点は参考になりました。あのように年代を区切って並べたのは、建物が何年に建てられたというような土地利用に関する資料が残っていて、それが実際に検出されて出土した資料と一致したからです。

江戸から明治の連続性を語るうえで、近代の考古学はしっかり検討されていないと比較できないので、少し突っ走ってしまっただような言い方をさせていただきまし。とりあえずはこんなところでは。

司会——どうもありがとうございます。「連続・非連続」というのは非常に難しい

テーマです。

波多野先生から近世考古学、さらには近代考古学が発展してきているというお話をいただきましたが、実は考古学というのはいま非常に危機的な状況にあります。各自治体は文化財、埋蔵文化財の調査をきちんと進めてきたわけですが、しかしいま、そういう状況が崩れつつあります。そういう危機的な状況のなかで、近世だけではなくて近代に対して考古学はなにを言うこ



会場の様子

とができるのか、実際の調査をやっている方々に発表していただきたいというのが、私の今回の狙いでした。

もう一つ、江戸東京学があります。現在いろいろな大学で講座が始まっていて結構人気があります。私は江戸東京博物館に長くおりましたが、江戸東京学に対して考古学からアプローチすることはこれまであまりなされていませんでした。考古学からいかに江戸東京の連続性・非連続性を語る事ができるかということですね。今回のこういった試みは、そうした状況を踏まえて、一般の方々、また歴史に興味がある方々にこういう世界もあるということを知っていただけたらというのも狙いでした。

今日はまだ第一歩ということで、まとめ

りきらない部分も多かったと思いますが、近世、近代などの時代区分に対して、考古学者がどのように考えて、どのような方法で切り込んでいったらいいのかという方向が、大事であると思っています。また、近代考古学や現代考古学に関してもさまざまな試みや関連する本も出版されていますが、歴史的な用語や概念をいじり回すだけではなくて、各地域の文化財である埋蔵文化財から議論を組み立てていくことが重要であると私は思っています。

汐留遺跡は非常に有名です。汐留遺跡には、一般の方々はまだあまりご存じないかもしれませんが、実は工業化でいろいろな工場（コウバ）が出来ています。鉄道をつくるための溶鉱炉があります。そのために使われたのが、江戸の上水です。江戸の上水の木

桶に鉄パイプの水道管がジョイントされる例も出土しています。そういった形でいろいろな技術が連続したり、また新しいものと古いもの、江戸の伝統的なものがジョイントされている場合もあります。こうした各地域からの考古学研究を積み重ねていくことによって、先ほど言ったような考古学から歴史学へのアプローチができていくといいと思います。今日は最後までお付き合いいただきまして、どうもありがとうございました。

会場を提供していただきました、たばこ塩の博物館、さらには住宅総合研究財団の皆さま、本当にありがとうございます。以上をもちまして、本日のフォーラムを終わらせていただきます。

1986年

- | | | | |
|-----|------------------------|---------|---------|
| 第1回 | 江戸東京フォーラム委員会の進め方と話題提供 | 小 木 新 造 | 歴史民俗博物館 |
| 第2回 | 都市下層社会の形成と変容 | 内 田 雄 造 | 東洋大学 |
| 第3回 | やわらかい都市構造 | 陣 内 秀 信 | 法政大学 |
| 第4回 | 考現学の考古学 | 佐 藤 健 二 | 法政大学 |
| 第5回 | 明治期の道路(街区)・路地の幅員基準について | 石 田 頼 房 | 東京都立大学 |

1987年

- | | | | |
|------|-----------------|----------|---------|
| 第6回 | 博覧会と盛り場の明治 | 吉 見 俊 哉 | 東京大学 |
| 第7回 | 明治期の繁華街の建築 | 初 田 亨 | 工学院大学 |
| 第8回 | 東京の土地・住宅史 | 長谷川徳之輔 | 建設経済研究所 |
| 第9回 | 江戸の構成と構造 | 加 藤 貴 | 北区教育委員会 |
| 第10回 | 水の都・深川成立史 | 吉原健一郎 | 成城大学 |
| 第11回 | 江戸の建築技術 | 西 和 夫 | 神奈川大学 |
| 第12回 | 松浦武四郎の一畳敷の書齋 | ヘンリー・スミス | コロンビア大学 |
| 第13回 | 徳川の旧家臣のみた、江戸・東京 | 井 上 勲 | 学習院大学 |
| 第14回 | 路上から見た江戸・東京 | 藤 森 照 信 | 東京大学 |
| 第15回 | 東京書物探索入門 | 大 串 夏 身 | 都立中央図書館 |
| 第16回 | 神田のサウンド・スケープの研究 | 鳥 越 けい子 | 法政大学 |

1988年

- | | | | |
|------|----------------------------|---------|-----------|
| 第17回 | 絵画史料にみる江戸の町 | 波 多 野 純 | 日本工業大学 |
| 第18回 | 明治期東京の飲料水販売 | 松 平 康 夫 | 東京都公文書館 |
| 第19回 | 江戸城御殿の室内空間について—障壁画下絵による復原— | 西 和 夫 | 神奈川大学 |
| 第20回 | 小江戸・川越のまちとすまい | 内 田 雄 造 | 東洋大学 |
| 第21回 | 現代東京の祝祭 | 松 平 誠 | 立教大学 |
| 第22回 | 丸の内の変遷とそこに働くサラリーマンの職と住 | 岡 本 哲 志 | 岡本都市建築研究所 |
| 第23回 | 浅草寺の境内・門前世界 | 竹 内 誠 | 東京学芸大学 |
| 第24回 | 都心定住を考える—市街地の「町」の現代的意味— | 奥 田 道 大 | 立教大学 |
| 第25回 | 都市社会調査の歴史から | 佐 藤 健 二 | 法政大学 |
| 第26回 | 世界都市東京の光と影 | 町 村 敬 志 | 筑波大学 |

1989年

- | | | | |
|------|---|---------|---------|
| 第27回 | 都市の語り出す物語 | 宮 田 登 | 筑波大学 |
| 第28回 | 江戸の都市計画—江戸前島を中心として— | 鈴 木 理 生 | 区立京橋図書館 |
| 第29回 | 江戸の武家屋敷について | 北 原 糸 子 | |
| 第30回 | 江戸の被差別・東京の被差別—もうひとつの江戸・東京— | 大 串 夏 身 | 都立中央図書館 |
| 第31回 | 江戸東京の遊び—かるたを中心に— | 村 井 省 三 | 村井かるた館 |
| 第32回 | 森鷗外の都市論 | 石 田 頼 房 | 東京都立大学 |
| 第33回 | 東京都心部における空間利用形態 | 山 下 宗 利 | 筑波大学 |
| 第34回 | 「響き」としての東京の街なみ—神田地区における建物の形態が道の音環境に及ぼす影響を中心に— | | |

- 鳥越 けい子 サウンドスケープデザイン
 第35回 東京の都市構造の変容とアジア系外国人問題 奥田 道大 立教大学

1990年

- 第36回 鶴屋南北の幽霊 横山 泰子 国際基督教大学
 第37回 東京と近代詩 行吉 正一 江戸東京博物館
 第38回 同潤会うぐいす谷アパートの建て替えをめぐる—マンションの老朽化と建て替え問題—
 内田 雄造 東洋大学
 第39回 東京の地価 前田 尚美 東洋大学
 第40回 江戸の地価 伊藤 好一 関東近代史研究家
 第41回 江戸のごみ処理 伊藤 好一 関東近代史研究家
 第42回 都市農業と土地問題 石田 頼房 東京都立大学
 第43回 天皇巡幸と「帝都」としての東京 吉見 俊哉 東大新聞研究所
 第44回 江戸の名所・王子 加藤 貴 北区教育委員会
 第45回 上水からみた江戸の都市計画 波多野 純 日本工業大学
 第46回 江戸名所絵における遠近法 ヘンリー・スミス コロンビア大学

1991年

- 第47回 江戸図屏風にあらわれた風俗 丸山 伸彦 歴史民俗博物館
 第48回 鋏形蕙斎の江戸一目図屏風 小澤 弘 調布学園女子短大
 第49回 見立絵というもの 鈴木 重三
 第50回 江戸住宅事情 片倉比佐子 東京都公文書館
 第51回 江戸・明治・大正のすまい 平井 聖 昭和女子大学
 第52回 最近の自治体住宅政策について 林 泰義 計画技術研究所
 第53回 東京市営住宅事業について 内田 青蔵 東工大附属高校
 第54回 東京における水際土地利用の変容—日本橋川と隅田川を中心として—
 岡本 哲志 岡本都市建築研究所
 第55回 江戸から東京への景観構造変化 窪田 陽一 埼玉大学
 第56回 東京都の都市計画と河川運河 昌子 住江 関東学院大学
 第57回 アジアのスラムと居住へのたたかい 内田 雄造 東洋大学

1992年

- 第58回 新宿ヤミ市の復原 松平 誠 立教大学
 第59回 鋏形蕙斎筆の「黒髪山縁起絵巻」と「江都名所図会」をめぐる—
 小澤 弘 調布学園女子短大
 第60回 芝居町と観客—都市文化の底流をさぐる— 小木 新造 江戸東京歴史財団
 第61回 「よ組」を中心とした江戸火消しの活動 鈴木 栄一 千代田区議員
 第62回 近代演劇人による伝統の発見 横山 泰子 国際基督教大学
 第63回 博覧都市江戸東京 吉見 俊哉 東大新聞研究所
 第64回 読売から新聞まで GERALD GROEMER
 第65回 音の風景と近代の忘れもの—大分県竹田市瀧廉太郎庭園整備計画をめぐる—
 鳥越 けい子 サウンドスケープ機構
 第66回 三越百貨店が演出した文化生活 初田 亨 工学院大学
 第67回 ヴェネツィアの経済空間—交易・市場・職人— 陣内 秀信 法政大学

第 68 回 都市のまつり 宮 田 登 筑波大学

1993 年

- 第 69 回 江戸、初期の土地問題 吉原健一郎 成城大文学
第 70 回 江戸勤番武士の生活 竹内誠 東京学芸大学
第 71 回 江戸のおんな 杉浦日向子 江戸風俗研究家
第 72 回 大名屋敷跡地の住宅地開発—麻布霞町の場合— 加藤仁美 跡見学園短大
第 73 回 新説・日本近代住宅史 藤森照信 東京大学生研
第 74 回 幻の東京オリンピックと万博 磯村英一 東京都立大学
第 75 回 東京市社会局と都市社会調査 佐藤健二 法政大学
第 76 回 近代における東京の都市庶民住居の発展 江面嗣人 文化庁文化財
第 77 回 江戸の町と京都の町 小川保 清水建設(株)技研
第 78 回 「まち」の死に立ち会うとき—汐入をめぐる— 伊藤毅 東京大学
第 79 回 谷中墓地をめぐる 森まゆみ 谷根千工房

1994 年

- 第 80 回 首都の葬送空間—江戸・東京の火葬場と墓地— 八木澤壮一 東京電機大学
第 81 回 葬式のフォークロア 宮田登 筑波大学
第 82 回 東京—極集中と今後の課題—より豊かな都市空間をめざして—
..... 東郷尚武 東京市政調査会
第 83 回 東京都政の 50 年 大串夏身 昭和女子大短大
第 84 回 博物館の住宅展示を考えて—人々は生活史をどうみるか— ジョルダン・サンド
第 85 回 都市空間とセクシュアリティ 上野千鶴子 東京大学
第 86 回 メディアとしての絵はがき 佐藤健二 法政大学
第 87 回 メキシコシティと東京の間で 吉見俊哉 東大社会情報研
第 88 回 北京と東京の比較都市論—歴史的空間構造と近代化のメカニズム—
..... 陣内秀信 法政大学
第 89 回 川越のまちなみの復元 内田雄造 東洋大学
..... 浅井賢治 東洋大学
第 90 回 河鍋暁斎と江戸東京 小木新造 江戸東京歴史財団

1995 年

- 第 91 回 都市と美術館と絵画—パリ・ロンドンと日本— 小澤弘 調布学園女子短大
第 92 回 野村コレクション「小袖屏風」とその周辺 丸山伸彦 歴史民俗博物館
第 93 回 終戦直後の東京の生活をさぐる資料 天野隆子
第 94 回 歌謡曲のなかの東京 大串夏身 昭和女子大短大
第 95 回 江戸の着物文化 田中優子 法政大学
第 96 回 江戸東京学への招待試論 小木新造 江戸東京博物館
第 97 回 「境内」からみた三都—三都の比較都市史序説— 伊藤毅 東京大学
第 98 回 盛り場考 神崎宣武
第 99 回 近世都市空間の創出過程について—都市構築の基盤材調達の視点から—
..... 北原糸子
第 100 回 江戸東京学への招待—生活の舞台としての都市空間— 小木新造 江戸東京博物館
..... 陣内秀信 法政大学

		高階 秀爾	国立西洋美術館
		田中 優子	法政大学
	司 会	内田 雄造	東洋大学
第 101 回	都市の民俗学—色・音・匂の変化—	小林 忠雄	歴史民俗博物館

1996 年

第 102 回	同潤会柳島アパートの生活	大月 敏雄	東京大学
第 103 回	同潤会による復興まちづくりと普通住宅建設について	佐藤 滋	早稲田大学
第 104 回	住文化の体験の場としての博物館	小澤 紀美子	東京学芸大学
第 105 回	縁切寺—東慶寺と満徳寺—	高木 侃	関東短期大学
第 106 回	考古学からみた江戸と他都市との比較	小林 克	歴史文化財団
第 107 回	日本パノラマ館と凌雲閣—浅草の 2 つの巨大建築は、当時の人々にどのような印象を残したか—	平井 聖	昭和女子大学
第 108 回	震災復興〈大銀座〉の街並みから	石川 幸恵	清水建設(株)
第 109 回	明治初年の大火と貧富分離論	石田 頼房	工学院大学
第 110 回	戦災復興計画の理念とその遺産—東京、仙台、名古屋、神戸、広島等をめぐって—	越沢 明	長岡造形大学
第 111 回	関東大震災後の東京の住宅地形成について	藤岡 洋保	東京工業大学
第 112 回	カフェーと喫茶店	初田 亨	工学院大学

1997 年

第 113 回	橋のアーバン・デザイン	伊東 孝	日本大学
第 114 回	城下町大坂、江戸の都市設計	篠原 修	東京大学
第 115 回	東京都都市景観マスタープラン—新たな景観まちづくりへの展開—	布施 六郎	東京都
第 116 回	江戸・東京の湯屋	松平 誠	女子栄養大学
第 117 回	江戸城から宮城へ—皇居を中心とする都市空間の変容—	米田 雅子	
第 118 回	江戸藩邸物語	加藤 貴	
第 119 回	建築家、佐藤功一と都市への視線	米山 勇	江戸東京博物館
第 120 回	明治の歌謡にみる東京	大串 夏身	昭和女子大短大
第 121 回	「江戸名所図会」と長谷川雪旦	鈴木 章生	江戸東京博物館
第 122 回	町奉行所・定火消屋敷・聖堂・上水—絵図・図面にみる江戸の都市施設—	波多野 純	日本工業大学
第 123 回	参勤交代—巨大都市江戸のなりたち—	原 史彦	江戸東京博物館

1998 年

第 124 回	寛永 13 年江戸城外堀普請と周辺地域の変化	榎木 真	新宿歴史博物館
第 125 回	関東・東国の部落史—部落史の「見直し」論議に引きつけて—	藤沢 靖介	部落解放研究所
第 126 回	明治期の被差別部落—都市東京と植民地主義の言説編制から—	友常 勉	部落解放研究所
第 127 回	関東大震災と朝鮮人虐殺事件	石田 貞	埼玉同和教育協
第 128 回	原宿の空間構造—人気の秘密を歴史から読む—	柳瀬 有志	法政大学
第 129 回	横浜市の市営住宅事業について	水沼 淑子	関東学院女子短大
第 130 回	目白文化村とその変貌	八木 澤壮一	東京電機大学
第 131 回	地域学の明日を考える	小木 新造	江戸東京博物館

		橋 爪 紳 也	京都精華大学
		結 城 登 美 雄	まちづくりプランナー
		森 ま ゆ み	作家／谷根千工房主宰
	司 会	陣 内 秀 信	法政大学
第 132 回	江戸歌舞伎の特色	服 部 幸 雄	日本女子大学

1999 年

第 133 回	東京・明治大正の人口問題	小 木 新 造	江戸東京博物館
第 134 回	江戸東京フォーラムと住総研 伝統的な履歴書	大 坪 昭	住宅総合研究財団墨壺
		吉 田 良 太	住宅総合研究財団
第 135 回	「ふるさと」としての東京深川—ある個人的な感想—	川 田 順 造	広島市立大学
第 136 回	都市と農村の蜜月時代—近郊農業の展開と流通の変化—	江 波 戸 昭	明治大学
第 137 回	永井荷風と東京	湯 川 説 子	江戸東京博物館
第 138 回	地域雑誌からみた町	立 壁 正 子	『ここは牛込、神楽阪』
		野 口 由 紀 子	『武蔵野から』
		大 野 順 子	町雑誌『千住』
	司 会	森 ま ゆ み	作家／谷根千工房主宰

2000 年

第 139 回	「ニュースの誕生」展と江戸東京学	木 下 直 之	東大総合研究博物館
		北 原 糸 子	東大社会情報研究所
		佐 藤 健 二	東京大学
		吉 見 俊 哉	東大社会情報研究所
		富 澤 達 三	神大常民文化研究所
第 140 回	長崎出島の復原と「海を渡った大工道具展」	西 和 夫	神奈川大学
		千 野 香 織	学習院大学
		波 多 野 純	日本工業大学
第 141 回	☆大久保にみる都市の国際化	稲 葉 佳 子	(有)ジオ・プランニング
第 142 回	☆神田多町—震災復興の「まち」から見えるもの—	小 藤 田 正 夫	千代田区まちづく公社
第 143 回	築地・横浜の外国人コミュニティ	森 田 朋 子	お茶の水女子大学
第 144 回	江戸東京フォーラムの果たした役割	太 田 博 太 郎	日本学士院
		小 木 新 造	江戸東京博物館
		陣 内 秀 信	法政大学
第 145 回	遺跡から江戸の生活文化を探る—江戸考古学最新情報—	波 多 野 純	日本工業大学
		後 藤 宏 樹	千代田区四番町資料館
		栩 木 真	新宿歴史博物館
	司 会	小 林 克	江戸東京博物館

2001 年

第 146 回	江戸の見世物	川 添 裕	見世物文化研究所
第 147 回	☆千住の町おこしと地域博物館の取り組み	所 理 喜 夫	足立区立郷土博物館
		荒 居 康 明	町並み研究家
		波 多 野 純	日本工業大学
		大 野 順 子	町雑誌『千住』

- 第 148 回 祭礼からみた都市空間の変容と地域コミュニティの形成—神田祭りを主な素材として—
伊藤 裕久 東京理科大学
- 第 149 回 江戸の女性と布橋灌頂会—立山博物館の試み—
鳥越 けい子 聖心女子大学
米原 寛 立山博物館
- 第 150 回 都心居住の再考—江戸東京の生活史・文化史の視点から—
波多野 純 日本工業大学
初田 亨 工学院大学
大月 敏雄 東京理科大学
森 まゆみ 作家・「谷根千」主宰
東 孝光 建築家・千葉工大
司 会 陣内 秀信 法政大学

2002 年

- 第 151 回 モダン都市・東京の読書空間—読書装置の 1920～30 年代—
永嶺 重敏 東大資料編纂所
佐藤 健二 東京大学
- 第 152 回 近代皇族邸宅にみる和風と洋風
水沼 淑子 関東学院大学
小沢 朝江 東海大学
- 第 153 回 江戸と怪談と怪異空間
内田 忠賢 お茶の水女子大学
コメンテータ・司会 横山 泰子 法政大学
- 第 154 回 ☆向島の成立と下町気質
佐原 滋元 向島百花園茶亭さはら
- 第 155 回 関一と近代大阪の再創造
ジェフリー・ヘインズ オレゴン大学
コメンテータ 石田 頼房 東京都立大学
" 内田 雄造 東洋大学
通 訳 ビュスト 東京大学

2003 年

- 第 156 回 大江戸八百八町と日本橋界限—『熙代勝覧』の世界—
コメンテータ 波多野 純 日本工業大学
" 森 まゆみ 作家・「谷根千」主宰
" 竹内 誠 江戸東京博物館
" 市川 寛明 江戸東京博物館
コーディネータ 小澤 弘 江戸東京博物館
- 第 157 回 もう一つの東京の近代住宅史：私論
山口 廣 日本大学
- 第 158 回 江戸のモノづくり—文化と技術のクロスオーバー— 基調講演 全相 運 韓国科学技術翰林院
コメンテータ 川田 順造 神奈川大学
" 高田 誠二 北海道大学
" 中村 士 国立天文台
" 橋本 毅彦 東京大学
" 波多野 純 日本工業大学
" 渡邊 晶 竹中大工道具館
コーディネータ 小澤 弘 江戸東京博物館
" 鈴木 一義 国立科学博物館
- 第 159 回 ☆日本近代の集合住宅の原点としての「下宿屋」
堀江 亨 日本大学
松山 薫 東北公益文科大学
高橋 幹夫 文化誌研究者

- 第160回 幻燈から映画へ—転換期の映像メディア— 岩本憲児 早稲田大学
 第161回 都市への記憶：「満州国」建築へのまなざし 古賀由起子 コロンビア大学
 コメンテータ 西澤泰彦 名古屋大学

2004年

- 第162回 音楽の世界における〈邦楽と洋楽〉 秋山宏 日本大学
 第163回 江戸東京に於けるスラムの発生と変容 内田雄造 東洋大学
 コメンテータ 加藤貴 早稲田大学
 第164回 ☆銀座の歴史と都市文化を考える 岡本哲志 岡本都市建築研究所
 第165回 よみがえれ江戸遺跡—都市遺構の保存と活用に向けて—
 基調報告 谷川章雄 早稲田大学
 〃 波多野純 日本工業大学
 事例報告 後藤宏樹 千代田区四番町資料館
 〃 佐藤攻 東京都埋蔵文化財センター
 〃 松尾信裕 大阪市文化財協会
 〃 扇浦正義 長崎県都市整備推進課
 司会 小林克 江戸東京博物館

2005年

- 第166回 江戸の養生所 安藤優一郎 江戸・都市史研究家
 コメンテータ 勝木祐仁 文化女子大学
 第167回 再考—小木新造の江戸東京学— 陣内秀信 法政大学
 パネリスト 波多野純 日本工業大学
 〃 内田雄造 東洋大学
 〃 吉見俊哉 東京大学
 〃 横山泰子 法政大学
 司会 小澤弘 江戸東京博物館
 第168回 ☆水上から江戸東京をみる—一品川の水辺と宿場— 陣内秀信 法政大学
 波多野純 日本工業大学
 第169回 ☆下北沢の魅力—日本型都市再生のあり方を探る— パネリスト 小林正美 明治大学
 〃 大木雄高 ジャズ・バー Lady Jane
 〃 吉見俊哉 東京大学
 司会 陣内秀信 法政大学

2006年

- 第170回 東京エコシティー—新たなる水の都市へ— 岡本哲志 岡本哲志都市建築研究所
 ロドリック・ウィルソン 法大エコ地域デザイン研究所
 石川初 ランドスケープ・アーキテクト
 田島則行 建築家・テレデザイン
 渡辺真理 建築家・法政大学
 久野紀光 建築家・東京工業大学
 パネリスト 猪野忍 建築家・法政大学
 〃 小林博人 建築家・慶応大学
 司会 陣内秀信 法政大学

- 第 171 回 大阪くらしの今昔館—「体感する」博物館活動— 谷 直 樹 住まいのミュージアム
司会・コメンテータ 小 澤 弘 江戸東京博物館
- 第 172 回 日本の町家—京町家と卯建の意味— 大 場 修 京都府立大学
司 会 波 多 野 純 日本工業大学

2007 年

- 第 173 回 ☆杉田玄白と小塚原の仕置場— 野 尻 か お る 荒川ふるさと文化館
コメンテータ 亀 川 泰 照 荒川ふるさと文化館
司 会 土 居 浩 ものつくり大学
司 会 小 林 克 東京都写真美術館
- 第 174 回 ☆地域資料としての『近代建築』— 川 口 明 代 文京ふるさと歴史館
司 会 北 田 建 二 文京ふるさと歴史館
司 会 森 ま ゆ み 谷根千工房
- 第 175 回 ^{みやこ みやこ} 都と京—東京と京都の人と暮らし— 酒 井 順 子 『都と京』著者
司 会 陣 内 秀 信 法政大学
司 会 横 山 泰 子 法政大学
- 第 176 回 巣鴨の賑わいの原点をさぐる—江戸の拡大と巣鴨地域— 秋 山 伸 一 豊島区立郷土資料館
司 会 成 田 涼 子 豊島区教育委員会
司 会 高 尾 善 希 東京都公文書館
司 会 市 川 寛 明 江戸東京博物館
司 会 岩 淵 令 治 国立歴史民俗博物館
司 会 小 林 克 東京都歴史文化財団
- 第 177 回 発掘資料からみる江戸東京の連続性・非連続性— 谷 田 有 史 たばこと塩の博物館
司 会 毎 田 佳 奈 子 港区教育委員会
司 会 水 本 和 美 四番町歴史民俗資料館
司 会 仲 光 克 顕 中央区教育委員会
司 会 波 多 野 純 日本工業大学
司 会 小 林 克 東京都歴史文化財団

2008 年

- 第 178 回 チャレンジ CG プロジェクト「江戸の町並みをつくる」— 高 橋 時 市 郎 東京電機大学
司 会 勝 村 大 東京電機大学
司 会 小 澤 弘 江戸東京博物館
司 会 波 多 野 純 日本工業大学
司 会 市 川 寛 明 江戸東京博物館
- 第 179 回 幻の日本万国博覧会—月島の地域学— 増 山 一 成 中央区教育委員会
コメンテータ 伊 東 孝 日本大学
司 会 陣 内 秀 信 法政大学
司 会 吉 見 俊 哉 東京大学
- 第 180 回 ☆川越のまちづくりと歴史的建造物の活用— 内 田 雄 造 東洋大学
コメンテータ 荒 牧 澄 多 NPO川越蔵の会
コメンテータ 藤 井 美 登 利 川越むかし工房
司 会 森 ま ゆ み 谷根千工房
司 会 陣 内 秀 信 法政大学

開催案内

フォーラムは、江戸東京フォーラム委員会で企画を検討し、年3～4回開催しています。
開催案内は、インターネットの当財団ホームページでご覧になれます。

URL = <http://www.jusoken.or.jp/edotokyo.htm>

発刊物など

研究論文・報告

- ①「江戸東京、生活空間の研究」研究所報No.14号/A4判19ページ/住宅総合研究財団/1988
- ②「江戸東京フォーラム委員会活動」(1)～(7) 研究年報No.18～24/A4判51ページ/
住宅総合研究財団/1992～1998
- ③「『江戸東京』時代の生活と政治」小木新造/A5判92ページ/住宅総合研究財団/2005.8

一般書籍

- ①「江戸東京を読む」A5判295ページ、筑摩書房、1991
- ②「江戸東京学への招待(1)文化誌篇」B6判290ページ/日本放送出版協会/1995
- ③「江戸東京学への招待(2)都市誌篇」B6判282ページ/日本放送出版協会/1995
- ④「江戸東京学への招待(3)生活誌篇」B6判273ページ/日本放送出版協会/1996
- ⑤「江戸東京学」小木新造/A5判225ページ/都市出版/2005

記録小冊子

- ①「地域学の明日を考える」B5判59ページ/住宅総合研究財団/1999
- ②「地域雑誌からみた町」B5判27ページ/住宅総合研究財団/2000
- ③「遺跡から江戸の生活文化を探る—江戸考古学最新情報—」B5判27ページ/住宅総合研究財団/2001
- ④「都心居住の再考—江戸東京の生活史・文化史の視点から—」B5判44ページ/住宅総合研究財団/2002
- ⑤「江戸のモノづくり—文化と技術のクロスオーバー—」B5判55ページ、カラー/
文部科学省科学研究費補助金特定領域研究「江戸のモノづくり」総括班/住宅総合研究財団/国立科学博物館/
東京都江戸東京博物館
- ⑥「よみがえれ江戸遺跡—都市遺構の保存と活用に向けて—」B5判42ページ/住宅総合研究財団/2005
- ⑦「東京エコシティ—新たなる水の都市へ—」B5判46ページ/住宅総合研究財団/2006
- ⑧「都と京—東京と京都の人と暮らし—」B5判40ページ/住宅総合研究財団/2007
- ⑨「地域資料としての『近代建築』」B5判32ページ/住宅総合研究財団/2009
- ⑩「巢鴨の賑わいの原点をさぐる—江戸の拡大と巢鴨地域—」B5判36ページ/住宅総合研究財団/2009
- ⑪「杉田玄白と小塚原の仕置場」B5判32ページ/住宅総合研究財団/2009
- ⑫「発掘資料からみる江戸東京の連続性・非連続性」B5判32ページ/住宅総合研究財団/2009

住宅総合研究財団機関誌「すまいろん」の住総研ニューズレターページ

江戸東京フォーラムについて

江戸東京フォーラムは1986年5月に住宅総合研究財団の助成研究として発足し、7月に第1回のフォーラムを開催しました。翌年度から、当財団の活動として、現在に至っています。

フォーラムは委員会で企画がつくられます。委員は、現在、下記の通りです。主な参加者は、建築史・都市計画・歴史学・民俗学・社会学・文学・美術史・地域学・地理学等に関心ある方で、どなたでも参加することができます。自由で活発な議論や意見交換が行われます。各分野での先端的な問題意識も示され、お互いの刺激と示唆を与えあう場です。

フォーラムの目的は、一言で言えば、東京の個性を再考することです。東京は、政治、経済、情報、文化が一極集中しています。都市機能が雑然と混ざり合って、極めて輻輳した多重構造都市とも言えます。この東京を解明する方法は、江戸から今日までの一貫した視座でとらえること、都市に関心を持つ人たちが、同じフロアで情報や意見交換をして、共通の基盤を持つこと、このような立場で、江戸東京の文化の変容、都市形成、日常生活などを考えます。

フォーラムは、企画の基本柱に基づいて立案をしています。その基本柱は、①「記憶」としての都

市を考察する、②「地域研究」の掘り下げる、③環境と都市の関係を歴史的視点で考察する、の3つです。

21世紀は「都市の時代」です。全世界の人口の大半が都市に住むという、地球規模での都市化が進みつつあります。その反面、環境破壊が今日の大きな問題として浮上しました。都市景観が個性を失い、画一化していることも気になります。

そのような時代を迎え、江戸東京フォーラムでは、引き続き東京を舞台に総合的な都市研究と、その成果の市民への還元に取り組みます。

フォーラム企画委員

委員長

陣内 秀信 法政大学デザイン工学部建築学科

委員(50音順)

稲葉 佳子 法政大学大学院工学研究科

入江 彰昭 東京農業大学短期大学部環境緑地学科

小沢 朝江 東海大学工学部建築学科

小澤 弘 (財)東京都歴史文化財団 東京都江戸東京博物館

小林 克 (財)東京都歴史文化財団

波多野 純 日本工業大学生活環境デザイン学科

森まゆみ 作家

横山 泰子 法政大学工学部一般教育

吉見 俊哉 東京大学大学院情報学環

発掘資料からみる

江戸東京の連続性・非連続性

2009年7月20日発行 ©

編集 住総研江戸東京フォーラム委員会

協力 たばこと塩の博物館

校正+DTP 有限会社 メディア・デザイン研究所

発行人 岡本宏

発行所 財団法人 住宅総合研究財団

〒156-0055

東京都世田谷区船橋四丁目29番8号

Tel.03-3484-5381 Fax.03-3484-5794

URL: <http://www.jusoken.or.jp>

住宅総合研究財団について

当財団は1948(昭和23)年、戦後の著しい住宅不足が重大な社会問題となっていた時期、これに憂慮した故清水康雄氏(当時清水建設社長)の提唱により、東京都の許可を得て設立された公益法人です。

現在は住生活に貢献しうる研究の委託・助成事業を中心に、住をめぐるシンポジウムやフォーラムの開催、機関誌『すまいろん』の発行等、学問と実践をつなぐ普及活動を行っています。

また、「住」に関する専門図書室を公開しています。蔵書数は書籍が約20,000冊、和雑誌が72誌、洋雑誌が10誌、学位論文が約330冊あります。江戸東京学関係図書は復刻版や古地図も含め、積極的に蒐集しています。